

住まいと窓(開口部)の関係

昭和の時代はエアコン無しでも、工夫しだいで暑い夏もそれなりにすごせた気がします。しかし、現在の首都圏住宅ではエアコン設置の要望は強く、特にマンションでは欠かせない設備になっています。

住宅の立地条件にもよりますが、自然の恩恵を最大限生かし、補助的にエアコンなどの設備機器を使うことが、地球環境や家計に優しい住まい方ですね。その為にも窓(開口部)の持つ特徴を整理してみましょう。

日本の住まいは夏の暑さを緩和するために大きな窓を数多く設け、通風や湿気の防止など、自然の快適さを取り入れてきました。

現在でも空気の流れを確保する為に、各部屋には最低限2方向の窓が欲しいところですが、いたずらに窓の大きさや数を増やすわけにもいきません。

窓は壁面に比べると1/5～1/2に断熱性能が落ちるので、断熱・遮熱性能を最優先で考えると、小さく少ないほうが有利になります。

最近では省エネの観点から、複層硝子やアルミとプラスチックを組合わせた断熱サッシを使う例が増えています。夏の日差しを遮る手段として、ブラインド、シャッター、サンシェード、カーテン、簾などがありますが、建物の外部に取り付けるほうが内部に設置するより、約2倍の効果があります。

大きな窓のある部屋は非常に気持ちのいいものです。しかし、家具の配置によっては壁がないと上手くレイアウトできません。

防犯的には戸建住宅の泥棒被害はその70%が窓硝子を破っての侵入です。

雨戸や格子などで防御できない場合は、ガラスとガラスの間にフィルムを挟んだ防犯ガラスの使用がお勧めです。

閑静な住宅地ではあまり気になりませんが、壁に比べて遮音性能が落ちるので、騒々しい立地条件では防音サッシや防音硝子、インナーサッシを設けるなどの工夫が必要になります。

一般的な住まいでは延床面積に対して窓面積の合計はどの程度あるのでしょうか？

戸建住宅の場合、平均床面積 135 m²に対して約 31 m²で窓の割合(開口率)は 23%で、マンションなどの共同住宅では平均床面積 66 m²に対して約 13 m²で 19%です。

建築基準法では各居室の窓の大きさの最低限度は床面積の 1/7(約 15%)以上必要になります。(基準法では採光斜線により有効採光面積を計算するので、窓があっても低減されたり無効になることもあります)

木造の在来工法や 2×4 工法では、壁の配置や壁量の多さが耐震性能と大きく関係するので、窓のことだけを考えて計画するわけにもいきません。

『風の流れるを感じる家』、『季節や太陽の変化を感じる家』、『一日中明るい光の差し込む家』など窓(開口部)に対してイメージが膨らみます。

窓の機能を最大限引き出す為には、配置、形状、大きさ、ガラスの種別など充分検討する必要がありますね。

(株)大塚建築設計事務所

<http://etuka.com/>